

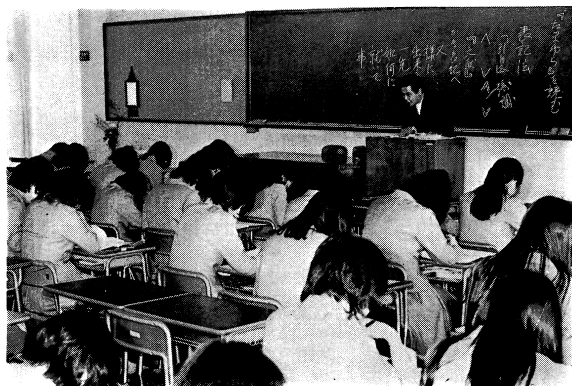
瀬戸口俊治先生追悼



昭和 51 年 撮 影

瀬戸口俊治先生

生 年 昭和十一年五月五日
没 年 昭和五十三年六月二十一日
満四十二歳



昭和 50 年 撮 影

弔

辭

鉦 清

谷 水

陽 文

子 雄

弔 辞

比治山女子短期大学教授瀬戸口俊治君。——改めてこう呼びかけるとき、万感が胸にこみあげ、いふべき言葉もない思いにかられる。君との出会いは、私の広島大学在任中にさかのぼり、そのころ君はまだ広大文学部の学生であった。飛鳥や吉野を歩く万葉旅行にも同行したことがあるが、たしか一行の幹事役であったあの時の君の姿は、不思議にいまも臉に焼きついている。昭和四十一年春、君が大学院博士課程を終えたとき、あたかも比治山女子短大が創設され、君は直ちにその専任講師として、十名内外の同僚とともに、学園建設に若いエネルギーを傾注した。一年おくれで広大の停年を迎えた私も、国信学長をいただくこの学園に馳せ参じたが、君はすでに落ちついた表情を湛える先任として、私を温かく迎えてくれた。爾来十一年、学園は懸命の模索をくり返しながらも、着実に発展の一路を辿ってきたように思う。その間、クラス担任として、教務部次長として、入試推進委員として、研修旅行引率者として、そしてまた大学祭における展示の実地指導者として、君の筆蹟に象徴される、緻密・正確な企画と、着実・果敢な実行とが、国文科と学園の運営にどんなにかけがえのない

推進力となってきたか、いまにして思い知らされるものがある。そしてそこに、確乎として存在する人格の力を認めないわけにいかない。これはまた稀有のことに属する。

瀬戸口君。去る二十一日夕刻、君の急逝の報に接したとき、一瞬、私はわが耳を疑った。先週木曜の球技大会で、君の活躍の状を目のあたりにし、そればかりか、死の前日も平素に変わらぬ元気な姿に接したばかりであったからである。信じられないと思いつつ、それを事実として肯定せざるを得ないことが、やがて徐々に分かってくるにつれ、悲しみとも怒りともつかぬ感情が、新たに洪水のように押し寄せてくるのをおぼえた。四十二歳という、人生の充足を将来に約束する身で、中学一年の耕治君を頭とする四人の愛児と、若い夫人とを残して、君はまたなぜ命絶えねばならなかったのか。生とは、そして死とは何か。

瀬戸口君。この一兩年來、これは君の研究のおのずからな発展と思われるが、君は社会的・文化的活動の領域にさらに一歩踏み込んでゆく機会を得たように思う。一昨年夏、RCCの依頼で、広島県出身者二世の言語生活を調査するため渡米したことや、昨年度から引きつづき、広島県教育委員会の委嘱で、各地方言収集緊急調査委員として、方言の録音の文字化とその解説を担当した

ことなどが、そのことを語っている。君が勇躍この任務に従い、その資料の整理や報告に、持前の集中力を存分に發揮している姿をよそながらうかがい、君の方言学徒としての確かな進展をひそかに祝福したことであった。それは長年にわたる藤原博士指導の下で身につけた、方言研究の精神と方法を、広島県という地域とその延展の上に適用したものと思われ、着々とあげられるその成果に、高い文化的意義を期待することができると思ったからである。君の死によって、それらの仕事は中断されたが、君の生命の燃焼を誘ったこれらの仕事は、必ずや君の後輩によって立派に受けつがれてゆくものと信ずる。

瀬戸口君。私個人としての逆縁の悲しみはともかく、学園として、国文科として、君に期待することが大きかっただけに、いま君を喪ったことがいかに大きい損失であるかを、すでに痛いほど感じはじめている。そしてこれは、時とともに深刻となるであろうと思う。しかし、残されたものは、勇気をもって、君の志を継承し、たがいに励ましあつて、前進せねばならぬ。とはいえ、君の意識の最後の瞬間、君の脳裡に閃いたであろう、四人の愛児への、稲妻に似た思いを想像し、私は涙を押えることができない。そしてまた、四人の愛児とともに残された洋子夫人の胸中は、推

し測るすべもないほどである。改めて人間の非力を痛感させられるが、賢明な夫人が、お子さんたちを立派に養育してゆかれることを信ずるとともに、縁につながるわれわれも、何かのお役に立つことがあれば、微力を捧げることが惜しむものでないことを、君の靈前に謹んで誓いたいと思う。

昭和五十三年六月二十三日

比治山女子短期大学国文科代表

清 水 文 雄

弔 辞

三日前、瀬戸口先生と廊下ですれ違った時先生は、いつもと変らぬ笑顔で気軽に声をかけて下さいました。それが、きのう大学に来てすぐに、先生のご逝去の知らせをうけ、あまりにも突然の事として、しばらくは信じる事ができませんでした。あの、お元気な先生がおなくなりになったなんて。それも、こんなにも突然に。あふれる涙を止める事ができませんでした。

つい一週間ほど前の球技大会では、先生はバレーボールの選手として、前衛を守っていらっしやいました。あの時のお元気なユニホーム姿、試合の時の掛け声、いつもと変らぬ笑顔は、今でもはつきりと思い出す事ができます。三月の国文科の研修旅行で信州に行った時、先生は登山靴をおはきになっていらっしやったので、雪道を歩かれる時は、先生が先頭でした。そして先生の歩かれたあとのかほみを、私たちは歩いたものでした。熨恋の茶店で、ごへい餅を食べていらっしやった先生が、食べてみるかとおっしゃって下さった一本の串を、四人で分けて食べた時のあのごへい餅のおいしさは、忘れられません。

先生はよくおっしゃっていらっしやいました。方言を研究するには、忍耐力が必要だと。先生の方言の取材旅行のお話を聞いて、私たちも、方言の研究のなみなみならない先生の御苦勞を察した

ものでした。一度、取材された時のカセットテープをお聞かせ下さった時がありました。お年寄りの方の言葉が録音されていましたが、録音する時、いきなりマイクを出しては何も話してはもらえなくなるので、相手の気持ちをとまほぐしてからでなければだめだと、その時の御苦勞をお話し下さいました。方言は、共通語では言えない味があると、先生はよくおっしゃっていました。先生は、その味にひかれていらっしやったのですね。私たちは、先生から教えていただいた数々の方言の美しさを、忘れる事はないでしょう。

瀬戸口先生、先生は本当に突然、私たちの前に二度と帰らぬ人となってしまわれたのですね。その突然の心の空洞は、梅雨空のように重く、耐え難いものがあります。私たちは改めて人の世の無常を悟らずにはいられません。瀬戸口先生、私たちは、いつまでも、いつまでも、先生のあの笑顔と教えを、忘れる事はないでしょう。どうか、いつまでも、私たちを見守っていて下さいませ。先生のご冥福を心からお祈り申しあげます。安らかにおねむり下さいませ。

昭和五十三年六月二十三日

比治山女子短期大学学生代表

鈞 谷 陽 子

(十二回生)

瀬戸口俊治先生追悼目次

瀬戸口先生を偲んで	国	信	玉	84
在りし日の面影を偲んで	室	山	昭	85
神	井	上	親	86
神	井	上	雄	86
瀬戸口先生の完全主義	江	後	寛	86
桃色のコーヒーカップ	野	崎	アサエ	87
はじめてお会いした頃	豊	嶋	睦	88
瀬戸口先生を偲ぶ	天	野	宏	89
追	天	野	茂	90
故瀬戸口先生を偲びて	玉	沢	ミサエ	90
想	下	川	幸	91
想	下	川	子	91
瀬戸口先生を偲んで	村	本	佐知子	92
卒業論文の指導を受けて	川	村	小夜子	93
瀬戸口俊治先生を偲んで	佐々木		幸	94
回想——瀬戸口先生と共に	棗	田	明	95
瀬戸口先生の想い出	松	田	直	96
私の中の瀬戸口先生	山	本	敦	97
瀬戸口俊治教授略年譜			子	98

瀬戸口先生を偲んで

— 科学的知識と生活の知恵

国 信 玉 三

私の長男の素一は僅か四カ月の短命で昭和十四年四月八日に夭折したが、その生れた十二月八日は格別厳しい寒さであったのと、また産湯の温度が低かったためかクシャミをしたのがもとでその後も百日咳のように毎日クシャミが止まらなかった。然し当時家にはまだ電熱器を使ったこともなく、暖を探るのに炭火を使用すれば空気が乾燥するのみでなく炭酸ガスのために汚れるので私の考えて室外でお湯をわかし、これを湯たんぽに詰めて布で厚く包み、体の両側と足の方と三個の湯たんぽで暖かく保った。産児は言葉を知らないから暑ければただ汗を出すだけで何も言わない。その汗を暖いおしぼりで拭てやると、クスグスタイのと快感のためかいつもキャッキャッと声を立てていた。私はそれをいいことにし毎日汗を出させては拭っていた。幼児は漸く気候も暖くなり初めた四月八日に遂に死亡した。その葬儀に私の生母が来て三個の湯たんぽを見ると直ちに「赤ん坊を湯たんぽで育てるといふことがあるか。お前たち七人の兄弟は皆このお母さんの懐で育てたのだ。こんど男の児が生まれたらお母さんが来て育ててやる。」と叱られた。全く人の懐は貧しくても富んでいてもその温度は常に一定である。

私は自分の児を蒸し殺したと反省した。英語でナレッジとウィズダムを区別しているようである。前者の方は知識であって個人の一

時的の体験によって得た知能であり、後者の方は長い生活を通して頭の中に収めたものでなく身の中全体にしみ込んでいる生活体験であって遺伝的の本能のようなものである。一方を知識と呼び他方を知恵と呼んでいるのではないか。

私はかつて岡政教授の追悼号の『たまゆら』の原稿に、岡政教授の葬儀には当日日直のため欠席した本学国文科出身の一女子職員がその翌週の日曜日に先生のお家に弔詞に参上するために、先生が毎日この大学へ出勤のために通っておられた道程を辿って先生の御生前を偲びつつ行つたと聞いて、例の万葉旅行や『奥の細道』の旅で先生の教育が学生の生活体験の上に生きているということ述べたが、今年の大学祭の日に附属幼稚園を訪ねて故瀬戸口先生の奥様のわが比治山学園におけるご勤務振りを拝見して同様の感に打たれたことを痛感した。

瀬戸口先生の奥様は、広島大学の三原分校を卒業された方で、既に小学校教諭の二級免許のほか幼稚園教諭の免許も取得されていたが、幸いに、本年四月、たまたま幼稚園に空席が生じたので、川崎教頭にお願ひして、幼稚園教諭として勤務して頂くことになった。まことに有難いことであった。その奥様の勤務振りを親しく傍観するとき、瀬戸口先生の生前のお姿を思い起こすのである。

ああ、瀬戸口先生は若くして逝かれたが、しかし、わが比治山女子短大には、大きな足跡をおのこしになった。開学の当初からクラスの担任として学級経営に意を用いられ、また卒論をはじめ学問研究の指導にも情熱を注がれた。更には、学生便覧の改制は先生のお力によるところが大であったと聞いている。私は、今、先生のかかるとご尽力に心からの感謝の誠をささげると共に、奥様ははじめお子様方が、精一杯生きられることを祈るばかりである。

在りし日の面影を偲んで

室山敏昭

瀬戸口俊治君が逝ってから、もう、一年三箇月が経ってしまつた。いまだに、そのことが信じられないというのに。

私が、瀬戸口君の急逝の報に接したのは、昨年の六月二十一日の午後五時すぎであつた。比治山女子短大の小林美和子先生からそのことを知らされたとき、私は、一瞬わが耳を疑ひ、確か、「そんな馬鹿な。」という一語を思わず発したように思う。小林先生には、失礼なことを言つたと反省しているが、しかし、正直、そう思い、今でもその思いが強い。

瀬戸口君と私とは、広島大学文学部の二年生のときからのつきあいで、それは、二十年以上の長きに及んだ。私が瀬戸口君の一年以上で、研究会でも、藤原先生の研究室をおたずねするときも、いつも一緒だったように思う。だから、よく喧嘩もしたし、遊びもした。そういつたつきあひを通して、私達はいつの間にか、何も言わなくても、互いの心の中が分かるような間柄になつていた。

私が鳥取に居た間は、なかなか会つて話す機会がなく、たまに、学会などで顔を合わせても、今進めている仕事や家族のことを、ひととおり話すと、別れの時間がきているといつたあわただしい時間しか持つことができなかった。しかし、それが、私にとっては、ひ

とつ大きな楽しみになつていた。

瀬戸口君との実に頻繁な行き来が再開されたのは、私がこちらに來てからだつた。広島に來て、一週間が経ち、ほっと一息ついてゐる午後、「瀬戸口です。」というおだやかな声と、「セトグチ」の「ト」をあざやかに高く発音するあのアクセントとをひびかせて、私の偶居に訪ねてきてから、大体、月に二度は、君と会つていたように思う。話すことはいつも、研究のこと、そして家族のことだつた。君の子ほんのうぶり、奥様思ひは、すでに我々の間では有名だつたが、私にも、飽きもせず、いつも聞かせてくれた。

二人で最後に話し合つたのは、昭和五十三年度の広島大学国語国文学会春季研究会の後、大学前の喫茶店であつた。君が逝く三日前だつた。「身体に良くないので、タバコをやめようと思つてゐる。」と話し始めた君は、すぐに話題を展して、「薩隅方言の造語発想、造文発想の研究を、体系的にまとめてみたいと思ひ、今、カードを整理しているのだが、一々の語の語源がなかなか分からなくて難渋している。」と、壮大な研究テーマについてよどみなく話を進め、この語の語源は何か、この語の語源についてはどう考えたらよいかと、次から次へと難問を發して、私をへきえきさせた。これが最後だつた。君との耳学問を楽しむことは、もう、できない。

君が遺した最愛の人達と、偉大なる未完成のまま残された仕事とを、私は、いつまでも忘れないであらう。

瀬戸口教授のなさったお仕事は、学問の世界でも、学内の業務分担の面でも、確實で、しかも安定感があり、堂々とした厚みをもっていた。用意周到、緻密で、精練された内容であった。国文学会の規約の立案、学会誌『たまゆら』を活字版にされたこと、教務部長として『学生便覧』の初版本を編集されたこと、「からまつ学寮」の合宿における吟行の俳句集を、印刷機械を持ち込んで印刷されたことなど、大きな仕事の中心になって推進された。これらの仕事は、多くの人の協力を得てなされたことは言うを俟たないが、多くの人が瀬戸口教授の周りに自然に集って力を合わせたのは、比治山女子短大の美風というだけでなく、人徳の然らしむる所であると信じている。その言、極めて穏やかで、未だ嘗て声を荒らげて言われたのを聞いたことがなかった。小生など、そのお声に接して、自戒の範としていた。自分自身で「よい」と思うことを考えることは、簡単であるが、それを集団の中で実現してゆくことは難しいことである。薩摩人の氏は、人の間をうまく立ちまわることとはされなかったが、人のかげで、こつこつと丁寧な仕事をされる、その熱意と、人格に惹かれて人が集り、協力の態勢が出来上ったのだと思う。

小生の講義用のノートを開くと、「瀬戸口俊治氏より聞く」として、「アクセント核」「アクセントの型」について、氏の高説を記録している。そして、氏が説明用にメモされた紙も、ノートに綴じ

合わせている。昭和四十五年五月六日の日付である。その頃は、研究室を同じくして、よくお話を承ったのである。大岩正伸氏は、藤原与一博士著『方言研究法』の書評を全国的学会誌『国語学』六十三集に執筆されて、「(藤原)博士一門の神技のような文表現採録」と述べておられる。瀬戸口教授もその一人として、神技のような域に達しておられることを感じていた。これは、学問の世界だけでなく、その他の仕事にも及んでいたと思う。令夫人のお話を承っても、何事についても、丁寧でやさしい日常であったようである。ことばについての感受性は、忌明けの席で、実の兄君の、薩摩方言についてのすぐれた説明を承って、御兄弟とも、充分に持ち合わせておられる素質であるうと思つたことである。

突然の御逝去の後、日を経て、いかに大きな存在であったかを感じるものが度々であった。御冥福をお祈りすると共に、御遺族の方よ、どうぞ、しっかりと歩いて下さいと声援をお送り申し上げる。

(昭五四・九・一〇)

瀬戸口先生の完全主義

江 後 寛 士

大分へ転動してきてわずか三か月後のことであった。瀬戸口先生は郷里が鹿児島なので帰省の途次に立ち寄っていただけると楽しみにしていたのに、その機会を設けるいとまもなく、あっけなく

急逝してしまわれた。

四十二歳。この若さが私にはショックだった。入院といった何の前触れもない、あまりにも急な死。しかも私より一つ若かったのだ。私はこの世に執着はないつもりで、苦痛さえなければいつ死んでもいいなどと勝手なことを言ったこともあるが、それは当分死ぬことはないだろうという気楽な前提があつてはじめて言えることだったのである。自分と同年代の身近かな人の死に接して、私は郷里の年老いた父母を思い、両親より先に死んではならないと痛切に思った。祈りたい気持であつた。

瀬戸口先生は、私より一つ若かつたが、大学院では先輩であり、比治山学園における仕事の上でも先輩であつた。教務のを中心として、あらゆる面に細大もらさぬ懇切な手ほどきをしていただいた。こちらに来て、いわゆる雑用を文字通り雑にこなして平気であるのを見て、比治山でのきめ細かな仕事ぶりを懐しんだ。当時は馬鹿丁寧に過ぎるのではないかと思つて反発しながら従つたのではあつたが、今にして思えば、人間関係を大切に、些事をも軽んじない精神は比治山学園のよき体質であり、それを具体的な仕事を通して瀬戸口先生から教わつたのであつた。

瀬戸口先生は完全主義者であつた。これは方言研究に携わる人たちの美質であるが、おそらく生来の性格や能力が演習や方言地図の作成などによって磨き上げられるのであろう。専門的なことはわからないが、先生の示されるプリントの見事さにそれは存分に表われていた。とにかく緻密なのである。妥協やごまかしはかけられない。その徹底ぶりが楽しそうに見えた。こればかりは真似のできる

ことではなく、ひたすら感心し、脱帽するしかなかった。

謄写印刷だつた「たまゆら」を第二号からいちはやく活版にし、本格的なものを目指したのも先生であつた。短大としてはあまり例がないほどの立派な学会誌があるのは先生のお陰である。ただ残念なのは、方言研究を志す学生が少ない上に、先生の完全主義に対応できる者がほとんどなく、先生のご苦労のあとが誌上にあまり残されてないことである。

「たまゆら」の編集、研究旅行、大学祭など数え上げれば際限がないが、教室での授業以外は、何もかも瀬戸口先生といっしょであつた。だから、コーヒーを飲んでよく話し込んだ。先生のコーヒー好きは相当なものだつた。私はいま、最高のコーヒーをいれて、その香りを西方浄土に送り届けてあげたい。

風よ、西に向つて吹いてくれ!

桃色のコーヒーカーップ

野崎 アサエ

瀬戸口先生は家庭的なかで、よく四人のお子さんたちの生活ぶりを話されていた。その先生を突然喪われたご遺族のご悲歎は無論のことながら、早世された先生のお心残りはいかばかりかと世の無情を悲しむ。

私は本学の創立当時は非常勤として毎週土曜日、一年生の「文学」で現代詩を講じていた。初夏のころだったと思う。二階から三階にあがるおどり場で、ちょうど上からおりて来られた白皙黒眼の若い先生から「国語学担当の瀬戸口です。鹿児島出身です、よろしく。」と初対面の挨拶を受けた。鹿児島ということばは私には特別にひびく。そこは、私が初めて教壇に立った、いわば私にとっては第二のふるさとともいべき土地で、そのことが初対面から先生を強く印象づけることになった。

昭和四十八年から私は本学の専任となったが、先生が私の研究室に来訪されるたび、私たちはよく鹿児島やまがわの風土や方言について語りあった。先生の郷里である山川町は、薩摩富士と呼ばれる美しい山容すがたの開聞岳の麓にあつて、枕崎市と並んで南方漁業で栄えてきた古い漁港である。先生は、幼少のころはとても虚弱で小学校も一年遅れて入学したと語られた。本学の球技大会では、教官バレーチームの花形メンバーとして活躍され、先生のバネのきいた敏捷な体のこなしを知るものには、想像できないようなお話だった。先生は、鹿児島の人にはめずらしくお酒類はたしなまれなかったが、そのかわり大のコーヒー党で、研修旅行のおりなど、いち早くコーヒーションを探しあてられるかただった。先生は私の部屋の可憐な桃色のコーヒーマグがたいへん気に入った様子なので、私が退職するときプレゼントすることを約束した。しかし、去年の四月、なぜか急に思ひたつて、同色のデミタスのマグ一式をお届けしたが、そのときの先生の無邪気な喜ばれかたに、贈り主は十分の満足を得た。約束していた例のマグは、今年の六月、付属幼稚園に勤務さ

れるようになられた奥様に、お届けすることができた。

先生は、もの軟かな口調で話されるが、納得のゆくまではゆずることのない理論家という印象のかただった。責任感が強く、その仕事ぶりは徹底し、記憶力も抜群で安心しておまかせのできる頼母しいひとであった。また、先生には明るい屈托のない一面もあつて、研修旅行や親睦会などではいろんなゲームに興じられた。とくにマツチ棒で見事な屋形を組み立てるといふ特技があつて、その器用さに驚く私たちを見て、手を叩いて喜ばれた先生のご様子がいまでも思い出される。

創立以来の瀬戸口先生は、国文科にとっては「もの知り博士」的な存在で、岡政先生を喪つた私どもにはとても頼りになるかただった。

瀬戸口先生の急逝は、本学には勿論のこと、学界にとつても一大損失である。かえすがえすも先生の夭逝は惜しまれてならない。

はじめてお会いした頃

豊 嶋 睦

私をはじめて瀬戸口先生とお会いしたのは、今から十四年前の昭和四十年九月にさかのぼる。それは、比治山女子短大設置のための認可申請事務で忙殺されていた時期であった。

当時は、大学の開設ラッシュの時代であり、特に、家政系と国文学系の大学の申請が多かった。必然的に関係学科のスタッフの需要が大であったが、国公立大や大都會の著名な私学へは人材が集っても、地方の短大ではなかなか得られない。比治山も、ご多分にもれず、教授陣の量の確保と質の充実に腐心したのであるが、お蔭で、申請書提出締切一か月程前には、教授陣の量的確保の見通しがついて、前方に灯のついた思いがした。ところが、この切迫した時期に、突然に、国語関係の予定者が就任の辞退を申し出られたのである。一日を二十五時間にして仕事をして書類提出の期限に間に合わないかも知れない、と思われる程多忙なこの時期の就任辞退によって、設置申請を一年遅延しなければならぬまいか、と心配した程の窮地に追いこまれたのである。

私が、瀬戸口先生とお会いしたのは、実はこの窮地に立たされ茫然自失の状態にあった時であった。

瀬戸口先生は、当時大学院に在籍されながら、非常勤講師として比治山女子高校にもお勤めして頂いていたのであるが、短大設置の申請書提出直前に突発したアクシデントの顛末をお話し致し、たっのご協力をお願いしたのであった。

先生は、藤原与一博士門下の俊秀で、望めば国公立大への推挙を得てお勤めも出来ただろうに、比治山学園の窮状を深察同情下さって、当時なお短大設置が危ぶまれていたにもかかわらず、比治山への就任を快諾されたのであった。先生のこの快諾がなければ、比治山女子短大の昭和四十年九月設置申請は或いは間に合わなかったかも知れない。私は、このことに思いをいたすとき、先生に心からの

感謝の意を表わさずにはいられないのである。

お蔭で短大は予定通り開学され、瀬戸口先生は専任の教師として就任されたのである。先生は、学術の研究は申すに及ばず、教育にも熱心でクラス経営や卒論指導に情熱を傾けられ、多くの才媛を育ててこられた。また、教授会や教務委員会の事例を克明に記録され、その記録をもとに学生便覧を作成された。現在、学生が利用している便覧の基本形式は先生の発案である。この意味で、先生は学生便覧の産みの親といってもよい。

実に先生は、設置申請時からの協力者であり、短大発展の貢献者であられた。よってここに改めて厚く御礼を申す次第である。

瀬戸口先生を偲ぶ

天野宏英

君逝きて一年余。しかし君の訃報に接したときの激しい驚きと悲しみの情念は今もなお消えることなく胸底によどんでいる。

あれは六月二十一日、定例の教授会が終り、電車にゆられて帰宅した直後のことだった。現業員のおじさんからの電話だった。最初は何かの間違いだろうと思った。というのは、君が、一月に亡くなられた国文科主任岡政教授の「たまゆら」追悼号の編集にたずさわっていたので、そのことが混がらがつているのだろう位にしか

思わなかった。しかし再度、瀬戸口先生が亡くなられたのでお知らせ致しますと告げられた時には、驚愕のあまり、もう一度念を押したほどだった。でも間違いはなかった。

あの健康な先生がどうして急に？ たしかに前日には、いろいろな仕事で集中して少し疲れ気味だと言って、君はいすを並べて暫く横になってはいたが、それにしても急逝するほど重いつゆ思わなかったし、何時ものように言葉をかかわして別れたのだった。

ともかく駅に向う。夜汽車の乗客はまばらだった。ときおり車窓を横切つてゆく町並や遠くに浮ぶ船の燈火をみつめながらも、頭の中では、短大創設以来、同僚として共に喜び悩み励まし合つてきた日々がことが走馬燈のようにめぐる。

東亜ハイツの団地に着いたのはもう十時に近かった。そこにはすでに同僚や先輩の顔が並び、香煙が流れ、そして君の顔には白いものがかけられていた。

「君逝き給う」誠実な人柄と几帳面な性格とによって、君に接した人たちに強く深い印象を残して。

長い間一緒にいた研究室に入れば、君が専門とした方言研究について、熱心に学生を指導している声が聞えてくるようである。しかし、君は今はいない。

君は、生前相継いでご両親を送つたが、ここに良寛の一首を添えて君の浄土への還帰を送ろう。

極楽にわが父母はおはすらむ

けふひざもとへ行くと思へば

合 掌

追 悼

單車の速度 ゆるめて過ぎつつ たまゆらの

眉えみ のこし ゆきにけるひと

あまの しげる

故瀬戸口俊治先生を偲びて

玉 沢 ミサエ

○先生の御通夜に侍して

亡き夫に泣き伏す母に寄り添ひて

無心に甘える幼な児あはれ

○校内球技大会にて

在りし日の颯爽とした御姿を

思ひ偲ばす球技大会

身も軽くバレーボールに興じ給ふ

師のほゝゑみは眼間にあり

思　い　出

下　川　幸　子

まだ夏の陽ざしのかすかに残る午後。いつもと同じように子供達の声の中で取り上げた受話器。十一年ぶりに耳にする三上先生の声。まるでタイムトンネルの中を潜りぬけている様な気持で、瀬戸口先生の追悼文のお話をお聞きしているうちに、あの頃のことを涙とともに、一つ一つ甦えってきました。新しいだけで何もない手さぐりの二年間に、毎日を力いっぱい輝かせて生きたすばらしい学校生活。でもそれはあの日から、私にはどうしようもない、切ない想い出になってしまったのです。

瀬戸口先生　きこえますか。

私は今、泣いています。あの頃もよく叱られて泣きました。先生は一度もやさしい言葉をかけて下さった事はなかったですね。いつも後からおこごとばかり。先生は私がどうして方言と係わったか、覚えてらっしゃいますか。いいえ、私自身よくわかりません。しかし、いつの間にか、印刷屋でカットしてもらった調査用紙を持って歩くようになっていました。ある時は、広大の方言研究会の方がたと、加計町へ一泊の調査に連れて行って下さいました。ある時は神戸へ、先生の研究発表をお聞きに行ったこともありました。先生は、女性の言葉使いが非常に楽しいといわれました。喫茶店でコーヒーをご一緒した時、「ミルクの入ったあまーいのが好き。」とい

ましたら、先生は「それ、そのあまーいがとてもいい。」と満足そうにおっしゃいました。遅刻して、坂道をかけのぼる私の後から、「ヒヤカー。ヒヤカー。」と、風呂敷包みをこわきにかかえて、寒そうに肩をすぼめて走っていらつしやった冬の日。「うちのこうじが、タンクローリーを「タンクウーチー」というのだよ。」と、とてもうれしそうにおっしゃってた。今はもう、中学生になっていらつしやるでしょうか。

いよいよ卒論という頃になって、他の先生方の研究室は多勢の学生でにぎやかにふくれ上っているのに、先生のお部屋は、井上先生とご一緒でしたが、とても静かでした。共同研究で、年末に一週間合宿をして、毎晩先生のお宅におじゃまして、やっと書き上げた卒論。私には、これで先生とお別れという気がしたのに、先生は、さあこれからだ、という顔をなさいました。

私の結婚式の一週間くらい前に、お電話を下さいました。それが先生とお話した最後なんです。七年前です。

私は今、平凡ながら幸福な毎日を送っています。しかし、あの頃のような熱い力はもうありません。これを書き終って、しばらく、何事も手につかなくなってしまうでしょう。でもその後はまた今まで通りの平穩な生活にもどると思います。

先生。

私は先生のお墓にお参りはしたくありません。話す時も、書く時でも、私の中には今でもちゃんと、先生が生きていらつしやるんです。

(旧姓杉山　一回生)

瀬戸口先生を偲んで

村 本 佐 知 子

瀬戸口先生が、亡くなられて一年以上もたちますのに、先生
のいらっしやった研究室のドアを開けると、元氣なお姿で微笑みか
けて下さるような、今でもそんな氣がしてなりません。あんなに早
く逝ってしまった先生、どんなにか御家庭のこと、ご研究のこ
と、学校のこと……お心残りだったことでしょう。

先生には、在学中はもちろん、卒業してからも暖かい慈しみをか
けていただきましたのに、なんのお役にも立てず御無沙汰ばかりし
て残念でしたかありません。

先生と私の出会いは、十二年前、太田川の土手筋がまだ舗装され
ていなかった頃、御宅が近かったせいか学校帰りに、時折ごいっし
よさせていただいたことから始まります。先生は、いつも誰にもわ
かりやすいはつきりした共通語を使って、もの静かに話をされ、時
には毅然とした態度で、几帳面に物事を処理されていたように記憶
しております。先生に国語法の講義を受けるうち、私は方言の研究
に興味をもつようになり、卒論の御指導を乞うようになりました。

二年生の七月末、瀬戸口先生を筆頭に、方言研究会十三名の学生
が、実習調査のため、飯室を訪れた時のことです。カードを片手に
録音機を肩にかけ、お年寄りを対象に資料を集める——一見、カッ
コよさそうに見えますが、実際自分の足で歩いてみると、方言のあ

るがままの姿を精確に記述報告するのは、なかなかむつかしいもの
でした。そんな時、瀬戸口先生は、あの独特なやわらかいふんい氣
で村の人達の中に一番にとけこまれ、自然傍受法の生きたお手本を
見せて下さいました。そして私たちは、方言に深い愛情を、また方
言に生きる人々に愛情を持ちながら、事実を見つめる冷静な眼、微
妙な音も聞きのがさない鋭い感、相手の心情を理解できるような落
ち着いた態度を学んだのでした。

資料のカード化、カードの分類、最後に、文表現全体を見わたし
ながら文末詞の役割と観察といった順序に、やっと論文を書きあげ
た時、途中で坐りこむ私を元気づけ励まして下さった先生に心より
感謝いたしました。文法の不勉強で未熟な論文でしたけれど、「研
究は、なんとかしながら、それを続けていたら、結局、自分のもの
となる」という先生のお言葉は、今日の私を支えていると思われ
るのです。

幼児語の研究をする人が少ないと嘆いていらっしやった先生にお
応えできませんでしたが、児童図書、特に、広島県の方言の入
っている民話の研究を続けていきたいと思っております。

コーヒーのお好きだった先生、
瀬戸内をこよなく愛された先生、

どうぞ 安らかに眠りください。

合掌

(旧姓小川 二回生)

卒業論文の指導を受けて

川 村 小夜子

瀬戸口先生が亡くなられたと、友人から知らせをもらった時、とても信じられなくて、何度も電話口で聞き返しました。あの、お元氣な先生と死とが、どうしても結びつかなかったのです。今でも、短大に行けば、いつでもお会いできるような、そんな気がしてなりません。

はじめて瀬戸口先生にお会いしたのは、高校一年生の時でした。現代国語を教えていただいたその頃から、よく方言のことについてのお話をお聞きしたものです。まさか、その後、私自身が卒業論文に、方言研究をとりあげようとは、その時思いもしませんでした。

短大に入學し、縁あって、瀬戸口先生に受けもっていただいて、たびたび研究室にうかがうようになってから、いつの間にか、方言というものに、興味をもつようになっていました。先生は方言のことになると、とても楽しそうにお話をなさいました。どれほど方言の研究にうちこんでいらっしやるのか、そのお話をおうかがいしている、ほんとうによくわかるのです。いろいろな所に出かけては土地の人との会話を録音し、そのテープを聞いて、正確に書きとり、一語一語にアクセントをつけていく、そんな単調な仕事を、丁寧に、根氣よく、熱心になさっていたお姿が、今でもはっきりと目にうかんできます。そんな先生を拝見しているうちに、方言を卒業

論文の題材に選んでみようと思うようになっていたのも、今思えば、不思議ではないような気がします。

けれど、実際にとりくんでみると、これは本当に大変な研究でした。会話を録音し、書きとり、アクセントをつける、一見、簡単そうにみえるこの仕事も、なかなかうまくいきません。自然の会話を録音できるように、雰囲気作りからはじめなければなりません。なんとか録音して帰っても、それからが、また大変です。先生は、一度お聞きになると、サッと書いて、アクセントをおつけになるのですが、私は、そうはいきません。何度も何度も聞き直し、それでもわからないことが、一度や二度ではありませんでした。

そんな苦勞をしているうちに、先生の偉大さ、すばらしさが、はじめで、研究熱心なお人柄と共に、いっそうよくわかってきて、尊敬せずにはいられなくなっていました。なんとか無事に卒業論文を書きあげることができましたのも、やさしく、丁寧に、わかりやすく、お教えいただいたおかげと、今でも感謝しております。

卒業後も、時々お会いしたり、方言関係のラジオの番組で、お声をお聞きするのを、楽しみにしておりましたのに、それも、もうできないのかと思うと、とてもさみしく、残念でなりません。これからは、先生の思い出と共に、お教えいただきましたことを、いつまでも大切にしていきたいと思えます。

(旧姓川村 三回生)

瀬戸口俊治先生を偲んで

佐々木 幸

何げなく、新聞に目を向けたとたん、本当に胸ががつまるような思いがいたしました。あまりにも突然の、先生ご逝去の訃報。先生のブラジルでの方言研究のお話を、お聞きしたいと思っていた矢先のこと、全く信じられず、新聞の活字を幾度となく読み返しました。

先生との出会いは、国語学の授業であったと記憶しております。その後、卒業論文のご指導をいただく一方、サークル活動では、放送研究会の顧問としてご指導を受けました。「ほくは、共通語のアクセントはどうも……。」とおっしゃりながら、熱心にご指導下さいました。

共通語にばかり目をむけていた私にとって、先生の国語学の授業には、興味深いものがありました。数多く示して下さいました方言から、私共の使う方言が、こんなにも深い意味を持ち、暖かさを持って生まれたのかと目を見張ることも何度かございました。そうした中で卒業論文に、郷里の方言を取り上げてみたくなりご相談いたしますと、先生のご郷里の鹿児島方言のテープや、広島県方言のテープを幾度となくまわしてください、音韻学的に、音声学的に、文法的に、人間の心情は……等々、研究のしかたをご指導くださいました。

それから、二カ月余り、テープを聞いては文字化、記号化していく練習をしてくださいました。先生は、学問に一途に打ち込まれるお人柄で、本当に厳しいご指導を受けました。

反面、お年寄りから話を聞かれる先生のお姿からは、人を大切に、思いやるお心を感じることがありました。何時間も語り続けるおばあさんの話に、まるで、自分のことのように語り返し、耳を傾けておられるのです。

そんなせいでしょうか。卒業論文に取り組んでおりましたころのことを、今でもありありと思い出し、なつかしく、意義深く感じます。

卒業後、何度か思いがけず、先生のお手伝いをさせていただくことがあり、新しい事をたくさん学ばせていただきました。ありがとうございました。

教壇で、教鞭をとりながら、先生から教えていただいた方言の持つ意味、味——暖かみのある、人間の生きざまを、子どもたちと考えてきました。尚一層、教えること、学ぶことを止めず、自分の生活の中に生かすことで先生のご恩に報いたいと存じます。それも、これも、先生のご温情あふれるご指導によるものと心から感謝いたします。思い出はいろいろとつってまいります、今は亡き瀬戸口先生のことを偲びながら、ご冥福をお祈りいたします。

(旧姓小田 五回生)

回想——瀬戸口先生と共に

棗 田 明 子

昭和四十八年春、セーラー服の高校生活を終え、私は青春の躍動の場、大学生活へと入って行つた。千鳥格子の胸の中では不安と期待と、好奇心が渦巻いている。

国文科一年Ⅱ組の教室に入り、始めて大学の教授から、身近にお話を伺つたのが、担任の瀬戸口先生であった。しいん、とした教室に、よく通る声で一言一言、大切に話される先生は、いかにも言語学の先生らしく、緊張している私達を無理なく大学の華やいだ気分へと解きほぐして下さった。

先生はバレーボールが大変御上手だった。入学してすぐの体育祭の時、私達Ⅱ組があれだけのチームワークで準優勝まで進めたのは、瀬戸口コーチと選手達の息のあった猛練習の結果だと思う。このバレーボールがまた一段と先生と私達の間を身近にして、いよいよ大学生活らしく、先生の研究室へ、皆が集まるきっかけとなったのは言うまでもない。授業の合間をみてはC棟の先生の研究室に集まる、集まると言っても別に、文学の話をするわけでもなく、勝手知つたる我家で、ただなんとなく自分達でさっさとコーヒードを入れて、先生を囲んで、たわいもないことをしゃべるのだ。そんな時先生はいつでも嬉しそうに私達の話を順番に聞かれる。「○○さん、最近どうです。」「△△さん、今日の僕の授業、解りましたか。」

のんびりしたこんな会話が、あの研究室が、とてもなつかしい。大学祭の国文学会での製作発表——先生と一緒に作った秋の祇王寺を思い出す。冬の信州への研修旅行。大学の二年間は先生と共にあつという間に過ぎてしまった。

私達は卒業して社会に出ても、なぜか新鮮な大学を忘れることができなくて、毎年の大学祭には必ずC棟の先生の研究室に戻つた。そしていつものとおりに先生を囲んで話すのだった。

卒業して三年目の六月には、みんなの要望もあり、クラス会を開くことにした。その頃、先生は海外での御活躍も華々しく大変御多忙であつたが、何よりもこの集まりを喜ばれ貴重な時間を私達と一緒に過ごして下さい。しみりとお互いなつかしさに浸る顔を見ると、先生も安心された御様子で、私達もクラス会を開いた甲斐があつたと思つた。

それから私が、先生の急逝の知らせを受けたのは、先生にお会いしたそのクラス会から一週間も経たないうちであつた。

「まさか！」だつてこの前みんなであつていつものようにコーヒードを飲んだじゃない……誰に言つても信じられるわけがなかった。信じようとすると、とても深い哀しみ、無念さだけが直撃する。

一年経つた今……なお、私の心の中には、ふだんと変わらぬ温かな先生の御姿しかない。そしてこれからも、いつまでも、生きていく私達の担任、瀬戸口先生でしか想うことはできない。

(旧姓石本 八回生)

瀬戸口先生の想い出

松田直美

雨が瀟々と降っている……梅雨時の雨の形容には似つかわしくありませんが、先生が逝かれた六月二十一日は、こんな雨が降っていたように記憶しています。

先生の想い出と言えば、授業で教えていただいたことを初めとして、課外活動では、放送研究会の顧問としても指導していただいたことです。

放送と言うと、どうしても発音・アクセント・イントネーション等が問題となります。この中でも、鼻濁音などの発音しにくく、又、聞き取りにくい音を、いとも簡単に発音され、他人の鼻濁音を難なく聞きわけられる先生には、いつも驚かされてきました。右の耳か、左の耳であったか、忘れてしまいましたが、どちらか一方が聞こえにくいと話されても、私達は、嘘のようにしか思えないほどの正確さであったと、覚えています。先生のお人柄は、几帳面な美しい文字に代表されるように、物事に対して必ず筋道を通され、論理性を追求される理性的な面と、ご郷里の鹿児島島の桜島のように、内に燃える情熱と、南国の持つ親しみやすい明るさを兼ねそなえていらっしやっただと思います。

今でもよく覚えてるのが、一枚の絵葉書と写真です。確か、指宿の海岸で砂の蒸し風呂に入っている人達の絵葉書を事細かく説明

して私達を笑わせられた事。そして、紅顔の美少年ならぬ一人の青年の写真。まだ、若かりし頃の学生服姿の先生の写真です。往年の映画スターのような感じで、ちょっとすました姿に、思わずぶっと吹き出してしまい、先生に申し訳なく思ったのを覚えています。そんな時の先生は、はずかしがりの内気な子供のように、こちらも子供を見るような眼で微笑んだものです。何とまで軽くさそうな笑顔が印象的です。今も、ふいっと後ろの方から肩でもたたかれそうな錯覚に陥ります。

先生が逝ってしまった……という実感は、未だに伝わって来ません。

先生が、卒業間近に、「壁を作りなさい。とにかく、自分で壁を作って悩みなさい。苦しみなさい。そして、壁を打ち破って乗り越えて行きなさい。きっと、何かが見つかるだろうから……。」と、叱咤激励してくださった言葉の意味を、しみじみと噛み締めている今日この頃です。

命だに心になふものならば

何かわかれの悲しからまし

先生の御教えを心の中に、これからの生活の中に活かして行きたいと思っております。

先生の ご冥福をお祈りいたします。 合掌

(十回生)

私の中の瀬戸口先生

山 本 敦 子

先生がお亡くなりになる一年程前、授業がひけて、先生のお部屋をおたずねしたことがあります。

私は、身体が不自由なため、かねてより就職のことが気にかかっていました。そろばんも全く出来ない私には、企業からの求人募集にそう条件など何一つ無いと思っていたので、この日、何とか先生に御相談し、おすがりしてみようと思ひ立ったのでした。

「実は就職のことなんですけど、私は一生つとめたいので……。」と申し上げると、先生は妙な顔をされて「結婚しないつもりですか。」と尋ねられました。私は、胸がつまりましたが、身体の状態などを詳しくお話するうちに先生も解って下さった様子でした。それから先生は、冗談を混じえて色々なお話をして下さった後、こう言われたのです。「短大に入っただばかりで、短大を出た後のことを考えるのは、ちょっとはやすぎます。まずこの大学の試験で頑張ってみることでしょ。努力すれば努力しただけ認められる、これがこの学校のいいところだから。」と。

外はもう暮れかかっていました。私は、先生の言葉を繰り返しながら部屋を出ました。先生には、私のあせりがわかってもらえないのかと、絶望にも似た打ちひしがれた思いでもありました。しかし、先生にこそ自分を認めてもらわなければいけない、こう思い始めた

のもこの時でした。以来、何か先生に対する競争心が湧いてきたのです。先生を無言で批難することもありました。たわいない悪戯もしました。

しかし、期末試験の日、気がついてみると、いつの間にか私の席の斜め後に、先生が立っておられるのでした。私は、先生が黙って見おろしておられるのを感じました。そして試験が終わると「書くのが大変だったね。でも、よく頑張っていましたね。」と言って微笑んで下さったのです。私は、この時、身体が震える程うれしかったのです。先生が、私のことを案じて下さったということが、何より有難いことでした。それまでの少しひねくれた根性が恥かしくもありました。

しかし、とても悔やまれることに、私は先生に対して一度も、感謝の気持ちを素直に表現できませんでした。先生に対して、私はまるでダダっ子の様でした。あんなに突然お別れすることになろうとは、思いもよらず、甘えっぱなしになってしまったのです。

私は一言、先生に心よりおわびし、お礼が言いたかった。それなのに、先生は何の前ぶれもなく逝ってしまわれたのです。私はもうこの気もちをどこへも持って行くことは出来ません。「努力さえすれば……。」この言葉が、私の短大生活を充実させました。これからの人生の支えともなります。そして、立派に、念願の就職も出来ました。しかし、一番御報告したい瀬戸口先生はもういらっしやいません。

(十二回生)

瀬戸口俊治教授略年譜

昭和11年5月5日、鹿児島県指宿郡山川町岡兒ヶ水三七五番地に生まる。同31年3月、指宿高等学校を卒業、同35年3月、広島大学文学部文学科国語学国文学専攻を卒業、同38年3月、広島大学大学院文学研究科修士課程を修了、同41年3月、同研究科博士課程単位を修得す。

昭和41年4月、比治山女子短期大学開学と同時に専任講師として就任、同43年4月、助教、同53年6月、教授に昇任す。その間、同45・46年、文教女子大学より、翌47年、広島大学文学部より、それぞれ非常勤講師を委嘱さる。昭和53年6月21日、在職中に急逝す。満四十二歳。

研究業績として、瀬戸内海方言調査のために私どもはどのような準備をしてきたか―広島県倉橋島における実習調査の報告―(広島大学方言研究会『方言研究年報』第四卷)、「鹿児島県指宿郡山川町岡兒ヶ水方言のあいさつことば」(同前、第六卷)、「中国語(漢語)方言研究文献目録」(同前、第七卷)、「瀬戸内海域における『馬鈴薯』の方言事実の分布について」(同前、第八卷)、「鹿児島県指宿郡山川町岡兒ヶ水方言の程度副詞」(同前、第九卷)、「広島県賀茂郡豊栄町方言の表現法―豊栄町方言の修飾語部―」(同前、同卷)、「種子島南種子町平山の音声生活―『体言十』などの話部音声について―」(同前、第二〇卷)、「九州南部方言の一発言事象について―薩摩地方のeと大隅地方のi―」(広島大学国語国文学会『国文学放』第二七号)、「種子島の子供のことばの

調査記録(作業四七)」(広島大学方言研究会報第九号)、「島根県飯石郡掛合町方言音声の研究―話部音声―」(同前、第一〇号)、「薩隅地方方言の方言地理学的研究」(『語尾』)、「語尾」(『語尾』)、「鹿兒島県指宿郡山川町岡兒ヶ水方言」(『録音資料』)、「文法」(『語彙』) (形容語の語構成)、「形容語彙の意味分類」(対照表)、「九州方言学会編『九州方言の基礎的研究』所収、風間書房、昭44)などのほか、口頭発表論文が数篇ある。

本学では、国語法・国語表現法を担当され、また、昭和47年を除いて、毎年、クラスを担当された。この間、教務部次長(昭46・48)・教務委員(昭50・51)・服装委員会委員(昭48・51)・入試推進委員会委員(昭50・52)・就職委員(二年次担任の各年度)等の要職に就かれ、緻密な企画のもとに、慎重に責務を果たされた。「学生便覧」の作成、卒業論文の指導、研修旅行の引率、「たまゆら」刊行、大学祭における展示等に際しては、積極的に活動され、貢献する所は極めて大であった。

社会的にも近年活躍され、昭和51年8月、ラジオ中国の依頼で海外の広島弁言語取材班の一員として渡米、多大の成果を挙げられ、また、同52年7月、広島県教育委員会から各地方方言緊急調査委員を、同53年5月、同委員・同企画運営委員を、更に、広島大学より昭和53年度広島大学公開講座(放送教育開発センター実験番組)講師をも委嘱され、将来の発展が大いに期待されていた。

昭和51年4月、比治山学園10年動続者として表彰された。